

令和元年度 第1回芦屋市市民参画協働推進会議 会議録

日 時	令和元年6月20日(木) 午後3時30分～5時30分
場 所	北館4階教育委員会室
参 加 者	会 長 渡辺 直子 副会長 平野 隆之 委 員 加藤 裕介 山岸 吉広 廣瀬 雅宣 欠 席 榊原 貴倫 松井 順子
事 務 局	川原 智夏(企画部部長) 浅野 令子(市民参画課課長) 御宿 弘士(市民参画課係長) 三浦 真衣(市民参画課課員)
会議の公表	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 部分公開
傍 聴 者	0 人

1. 会議次第

(1) 開会

(2) 議題

① 市民参画協働に関するアンケートについて

② 次期市民参画協働・推進計画について

(3) 閉会

2. 配布資料

資料1：会議次第

資料2：委員名簿

資料3：アンケート結果概要版

資料4：アンケート報告書

資料5：第3次計画骨子案

3. 審議経過

(事務局：浅野)

ただ今から、芦屋市市民参画協働推進会議を開催します。市民参画課の浅野でございます。よろしく申し上げます。

前回の会議にて、これまで委員をお願いしておりました、自治会連合会選出の田中様が退任され、新しく廣瀬様が委員として就任されたことをご報告いたしました。本日、廣瀬様が初めてご出席されておりますので、廣瀬様からの自己紹介の後、委員の皆様方も簡単で結構ですので自己紹介をお願いいたします。

**(廣瀬委員)**

自治会連合会の会計をしております、廣瀬でございます。芦屋には30年くらい住んでおりまして、会社も芦屋にございます。あとは、交通安全協会の副会長もやっております。よろしくお願いいたします。

**(加藤委員)**

株式会社エコーという会社で代表をしております、加藤でございます。事業内容はWEBマーケティング、ネットで集客したお客様を受付する会社です。あまり行政とは関わりのない立場ですが、そういった観点から行政にお役に立てるかなと思います。よろしくお願いいたします。

**(平野副会長)**

日本福祉大学の平野と申します。よろしくお願いいたします。地域福祉の事を専門的に研究しています。芦屋市には地域福祉課という課があって、地域福祉を研究する人間からすると、非常に注目すべき取組をいろいろとされています。市民参画協働と地域福祉は、本当は切っても切れない関係かなと思いますので、こちらの取組なども協力させていただいて、芦屋市全体が市民協働が進むまちになればいいなと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

**(渡辺会長)**

私は、れんこん舎という会社の取締役で、フリーランスの編集者、プランナーをしております。最近では芦屋市の市民活動にはまりまして、本業そっこのけで市民活動をサポートすることが多くなってきております。どうぞよろしくお願いいたします。

**(山岸委員)**

芦屋市社会福祉協議会の山岸と申します。社会福祉協議会は地域住民の方と福祉活動、例えば見守りのような福祉課題の解決を一緒に考えていく団体です。この場では福祉の観点から参加させていただいて、市民参画協働がより発展するようにお手伝いをさせていただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

**(事務局：浅野)**

ありがとうございました。それではこれから次第に基づいて議事に移らせていただきます。芦屋市市民参画協働推進会議の規則第3条で、「委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。」とされていますが、本日は、7名中5名がご出席ですので、この会議は成立しております。また、芦屋市情報公開条例第19条により、会議は原則公開ですので、傍聴人がいらっしゃいましたら、入室していただきますが、本日、傍聴人はおりません。会議録作成のため、会議内容は録音いたします。会議録は発言者のお名前を含め、後日公開いたしますのでご理解ください。これからの議事進行につきましては渡辺会長にお願いします。では渡辺会長よろしくお願いいたします。

**(渡辺会長)**

では会長を務めさせていただいております、渡辺です。新しく廣瀬さんをお迎えして、令和にもなりましたし、フレッシュな気持ちでやっていきたいと思っております。よろしくお願ひします。

それでは早速ですが議題1に移ります。議題1は市民参画協働に関するアンケートについてです。アンケートをした結果がでてきているようなので、それについて事務局の方から説明をお願ひします。

**(事務局：御宿)**

◆事務局より資料確認。

◆事務局より「資料1：市民参画協働に関するアンケートについて」に基づき説明。

**(渡辺会長)**

ありがとうございました。このような立派な見やすい報告書を作っていただきありがとうございました。では、今の報告に基づいて皆さんからご意見、ご感想など、なんでも良いのでフランクにお話ししたいと思います。廣瀬さんは初めて参加されますので、どんな印象を受けられましたか。

**(廣瀬委員)**

私は自治会も参加しておりますので、自治会も傾向としては同じだと思います。だんだんと高齢化が進んできて、若い方に入っていただくのも難しいです。これは交通安全協会もしかり、納税協会もしかり、活動に対して参加されない方が多くなっています。そこはみんな同じ課題と思っています。

根本的なことですが、芦屋市が市民参画と言ったとき、まず芦屋市に人が来てもらわないとだめなわけですから、芦屋ブランドの確立をちゃんとしておかないといけないと思います。例えば子どもさんがいる人でしたら、学区とかいろいろ考えると東灘区が一番良いとなります。芦屋市は子どもの関係はあまりよくないという若い方もいます。共働きで子育てをしている人が増えているという結果も出てきておりますので、例えば、JR芦屋駅の北側にあるラポルテの空いているスペースを子育てのスペースにしてみるなど、空いている部分を有効に使うことを、市民参画課や福祉に携わる皆さんが参加して、そのようなことを市でしていただいたら、芦屋市も住みやすいまちになり人も集まるのではないのでしょうか。そこからいろいろなことを発信されて、新しく皆さんに参加していただくようにすると少しは前に進むのかなと思います。なかなか予算とかそういうこともありますから、難しいとは思っています。最近、芦屋市自治連合会や自治会の会合に参加した時に、そういう話を聞きます。

**(渡辺会長)**

高齢化の話が出ましたが、日頃、高齢者（問題）と接することの多い福祉協議会の山岸さん、日々、活動や仕事をされていていかがでしょうか。

**(山岸委員)**

福祉の分野でも少子高齢化や人口減少は大きな課題になっています。地域組織の中でも、自治会、老人会、PTA、そういった組織率の低下や高齢化が地域の活動にも影響が出てきていると思います。

**(加藤委員)**

高齢化という話が出ましたが、今の芦屋市の分布、人口の年代別の割合をお伺いしたいです。前回調査が2014年。5年前と5年後の今回で、その分布が芦屋としてどう変わっているのか気になったので、それを伺ったうえでお話ししたいと思います。

**(事務局：御宿)**

5年前と今回で比べたら、65歳以上の割合が確実に増えています。10代が10パーセントくらいの割合です。計画のアンケート調査をする際に、市民の縮図となるよう無作為抽出をしました。世代別で調査をしないと市民の縮図とならないので、割合は考えて送っています。だいたい10代が10%台。30%から40%くらいが65歳以上という傾向になっていたかと思います。

**(山岸委員)**

高齢化率は、高齢介護課が毎月、前月末時点の高齢化率を町ごとにホームページにアップしています。高いところだと27、28パーセント。もっと高いところでは30パーセントを越えるところもあり、明らかに全国平均並みの高齢化が進んでいます。私は仕事の関係で地域アセスメントをやっていて、精道小学校区と朝日ヶ丘小学校区の地区担当をしています。児童の数を見たら、推計では15パーセントから10パーセントくらいに下がる見込みも出ています。子どもが減っていく中で、これからどうやって芦屋市に人を呼び込んでいくのが課題です。

**(加藤委員)**

ありがとうございました。市としては高齢化が進んでいるということですが、アンケートの母集団の割合を見たら、結構若返っているように感じます。割合比率も50代以上、50代60代70代が前回63.5パーセントなのが、今回60.3パーセントになっている。60代以上になると、前回49.4パーセントなのが今回は43.3パーセントになっているので、5年前より結構若い世代が回答していると思います。

男女別で見ると、女性は同じような割合ですが、男性は40代が増えている。また、10代20代の男性の割合が、前回2.5パーセントなのが今回は6.1パーセントです。かなり若い世代、さらに男性で働いて普段市内にいない世代が増えているので、コミュニケーションが薄くなっているのかと思います。だから「関心はあるがなかなか参加できない」という回答が増えたのではないのでしょうか。裏を返すと、高齢社会で年配の方をどう巻き込んでいくかも重要ですが、若い世代、参加したいけどできない人を巻き込んでいくことも重要だと思います。今回、若い層の回答が増えているので、そういった人たちの声をどうやって発掘するか、どう巻き込んでいくかが

課題になるのではと思います。総論としては、巻き込んでいきたい層の意見などで、どういう課題があって、それをどうやって解決するのが、今後の施策に繋がるのではと感じました。

**(渡辺会長)**

平野先生、何かご意見ございますか。

**(平野副会長)**

委託調査先がライフデザイン阪急阪神ですよね。調査対象の話も出ましたが、このライフデザイン阪急阪神はこういう結果を見てどう思っているのかなと思いました。電鉄会社としては定住志向を持ってほしいし、芦屋の人口を増やしてほしい。会社として、そういう暮らし方みたいなものをどうデザインすればいいのか関心があるはずです。行政の観点だけではなく、せっかくこういう委託調査をしていただいたので、アンケート結果に対してどう思っているか聞いてみたいというのがあります。地域福祉課とのプロジェクトでもライフデザイン阪急阪神の方に、芦屋市の魅力などを、企業目線で評価していただけるようなアイデアも伺っていただいて、是非巻き込んだらいいのではと思います。

市民以外のアクターとも行政が協働するというのもひとつあります。このアンケート結果を展望していく中で、必ずしも市民参画課としてはいい情報ばかりではないわけですよね。やはり子育て世代へ、芦屋の魅力はどう伝えていくかとか考えた時、市民以外のアクターとの協働も市民参画協働推進の中に入れながら考えていくのもどうでしょうか。むしろ、市民だけに「何か参画してよ。」という理屈はだんだんしんどくなってくると思います。

先ほど、人が人を呼ぶという意見がありました。この人という概念を、この調査結果を参考にしながら、より幅広く考えていく必要があると考えた時に、アクターとして様々な人を使っていくことも必要だと思います。最終的に、この課としての仕事は市民同士の協働です。しかし、そこまでの手順の中で、いきなり市民に市民協働と言ってもちょっとしんどい環境になっているので、迂回路を考えていくのもいいのではないのでしょうか。

調査結果をあまりダイレクトに前回と比較すると、手詰まり感が出てくるので、アンケートはアンケートとして見て、かつ、巻き込みたい層の意見内容も見る。比較的若い世代の傾向についても視点を広げて考えていく事が必要と感じます。

最後に、問 34、72 ページの「市民参画協働においてどのような機会を行政に求めますか」とあります。いろいろと書いてありますが、あまり無回答が多いわけではない。行政と協働していくというところで、積極的に市民参画協働においてどういう機会が必要なのかということ、もう少しここをうまく深めて展開していただけたらいいと思います。市民参画課としてはいきなり「協働、協働」と行きがちです。しかし、そうではなく、人が人を呼ぶような、上手に市民間の交流を促進することが必要で、迂回路やパス、通り道を広げていくといいのではということが、このアンケート結果で見えてきたのかな。そういうふうに使っていただけたらと思います。

**(事務局：御宿)**

ありがとうございます。このアンケートの前段部分はずっと地域の活動の事を聞いていますが、

途中の段階から地域によらない活動のことを聞いている部分があります。それぞれの興味軸は何かということに対比させるようなアンケートのかたちはしています。細々としたところを説明しなかったのは、細かいところは我々の方が施策に落とし込み、具体の事業を書くときの参考なのかなと思いお話しませんでした。例えば地域の話ですと、祭りや環境衛生とかに対する活動が多いし、そういうところに興味はあるようです。では、そこに参加していない人たちは何をしているのかという話になったら、スポーツとか、廣瀬さんがおっしゃっていたように、子どもの関係が意外と多い傾向です。それ以外にも健康という観点もありました。個人で活動している方の興味の範囲と、地域で活動されている方の興味の範囲が、微妙に興味のアンマッチがあるのですが、そこにうまく接点があれば意外と繋がる部分があるのではと感じました。ただ、結論についてはライフデザイン阪急阪神の担当者に聞いていませんので、それはまた別途聞いてみて、調査することによって我々としても新たに気づきがあるのかなと思いました。

あと、加藤さんにおっしゃっていただいた前回の回答割合の比較については、私どももそこまで目が行っていませんでした。前回よりは若めの層が答えているという事は、その中からある程度、いろいろな施策に興味を持って市民参画協働で、全部がそれでやるというわけではないですが、行政と一緒に何かやりませんかとか、あるいは地域の人何か活動する時に一歩踏み出す時の観点とか、この中から読み解くことによって切り口が出てくるのかなと感じました。大変貴重なご意見ありがとうございました。

#### (渡辺会長)

みなさんの話を聞いている中で、私が先日、greenz.jp というインターネットマガジンの元編集長である兼松佳宏さんの講演を聞いて感心したことと合致するなと思っていました。

彼は一般社会のコミュニティの活動を学校生活での活動に例えていて、コミュニティを円滑に回すために当番活動と係活動と部活動があるという表現をしていました。当番活動というのは掃除当番とか、あまり積極的にはしたくないけど、コミュニティを円滑に運営する中で担当として順番にやる必要があることです。本来、それは好きではないけど、当番の期間は頑張ってやろうとしている。係活動はクラスのためになることで、自分の得意分野を生かせる活動。最後に部活動と言うのは、先ほど説明された興味軸の活動のことです。興味があり好きなことだから、日替わり制にしなくとも毎日でも続けられる活動のことです。この当番活動・係活動・部活動が、今一緒に語られている部分がありますが、逆に言うとそれがヒントになるのではないかと思います。平野先生の「パスみたいなものを作った方がいいのでは。」という意見がありましたが、そのパスが部活動を醸成することによって、それを係活動に寄せていくということなのではないかとひらめきました。興味もないのにいきなり当番ばかり押しつけられたら、人間は嫌になるから。部活動みたいなものを市が助成してあげて活発化させたら、知り合いもでき、楽しい事もいっぱいやらせてくれて、そうなるギブ&テイクで係もやるというストーリーができてくる。そういう戦略を市もちゃんと立てた方がいいと思います。当番活動だけを押しつけられたら「高い税金を払っているのに、なんでこんなことをしないとイケないの。」と、どうしても感じてしまう。やはり税金ではないところの、何かちょっと美味しい気持ちを作りながら自分たちが担える活動を作っていくということが大事だと、平野先生の話聞いていて思ったし、このアンケートの結論

や数字を見ても思いました。

では、そのパターンを戦略化する場合、何が必要かと言うと、それは「人材」が必要です。部活動をいっぱい作りながら、楽しい事をいっぱいしながら「係が必要だよ」と、オルグしていくような戦略活動家みたいな人を、まちに作っていかないといけないと思います。ただ、一般市民に対してそれを求めてもなかなか厳しい。そこは平野先生が言っていたように、他のアクターが必要です。やり方もわかっていて、人の心理と言うのはこのスイッチを押せばこうなるとプロ的にわかっている人たちを少し入れて、自然に部活動から係活動に流していくような。それは人材を育てないと無理ですので、すごく時間はかかります。だから、すでにでき上がっている人を連れて来た方がいいのではないのでしょうか。そういう事が必要だと、みなさんの話を聞き、このアンケート結果を見て思った次第です。

#### (廣瀬委員)

集会所の運営の話になりますが、集会所って自治会は使ってもいいけど老人会が使う時はお金が必要とか、いろいろな制約があるんですね。逆に言うと、それを取っ払ってほしいと思っています。我々が使用する集会所ですと、コーラスのグループがとても活発です。人数としては6,70人で、高齢の方も参加して頻繁にやっています。コーラスだけに限らず、そういった団体で使っている枠を市民参画課の方で増やすことによって、人材を連れてきて、そこから人のつながりができてくるのかなと思っています。

#### (渡辺会長)

私もそう思います。私は市外から来たのですが、芦屋ってすごく町内にこだわりますよね。「どこの町内に住んでいるの。」とか、市自体もそんなに大きな面積でもないのに、ものすごくこだわるところがある。集会所にも垣根があって、朝日ヶ丘町の住民は朝日ヶ丘集会所に行くし、翠ヶ丘町の住民は翠ヶ丘集会所に行く。この間は情報も断絶しているし、やはり岩園町みたいに集会所がないところは、何の活動も起こらないということになってしまう。

私は最近ご老人を招いてお茶会をしていて、岩園町に集会所がないから自分の家でひそひそとやっているんですね。これをせっかくだし、どこかに持って出たいなと思っています。だけど岩園町に住んでいる私が、翠ヶ丘集会所や朝日ヶ丘集会所を使おうとすると、とてもハードルが高いです。そうすると、その活動がやりにくくなって、ハードルが高いと腰が引ける。だから廣瀬さんが言ったことはすごく分かります。

#### (廣瀬委員)

相続税を払えない場合に物納されるケースがあります。そのような時に、芦屋市がその住宅を買って改装し、集会所として作っていくということにお金を使ってもいいのではないのでしょうか。市の支出として、川沿いの手摺や柵はシンプルでいいのにお金をかけたり、おかしい使い方をしている気がしてしまっ。それであれば岩園町にそういう集会所のようなものを作った方がいいのではないかと感じます。また、南芦屋浜の方は防災拠点がないので「津波が起こった時にどうするのか。」という意見もある。そういう建物を作ることによって、市民がそこに集まり、ひとつ

の市民参画の足掛かりになるのではと思います。しかし、これは予算があつてのことだから、あまり言えないですが。だから平野先生がおっしゃっているようなことは、全くその通りだと思います。

#### （事務局：御宿）

公共施設、道路とかインフラ関係も含めてですが、過去のある一定の時にもものすごく作っているので、その更新需要が今高まっている関係があり、国も統廃合するとか、あるいは今以上に面積を増やすなどと言う方針をたてています。そういう観点から、我々も新たに公共で直接、集会所を作るというのは予算面でも厳しいです。仮に作ったとしても、今後維持していくためのメンテナンスコストがかかってしまいますし一方で、社会保障関係経費も増加していますので、それ以外の事が財政面で圧迫されてできなくなってしまうというのがありますので、直接作るということは難しいかもしれない。ただ、空いている物件をうまく使うという観点はあると思います。それも予算との兼ね合いがありますので、賃料が発生したりすると簡単には動くことはできないですが、例えば「無償でその物件を使っているよ。」という奇特な方がいたら、うまく活用して考えていく、それもひとつの手段なのかなと思います。

#### （山岸委員）

社会福祉協議会では、打出商店街に無償で提供していただいているスペースがあります。アーケード代だけ商店街に加入するかたちで払っています。そこをフリースペースにしていますが、やはり持ち主がいますので、手が入れないという課題があります。提供を受けてもそこを触れるのかとか、費用面が課題ですね。先ほど渡辺会長おっしゃったように、自分の家で活動されているということも私の地域で良く聞きます。ハード面を行政に頼るのではなく、市民が参画するということであれば、自分の庭も使えるとかアイデア出しができるといいと思います。住み開きと言いますが、自分の家を地域開放していくという所がこれから増えて行けば、そういったところも、芦屋ブランドの1つになるかなと思います。

#### （渡辺会長）

住み開きは実際にやってみたら楽しくて、家って色々なことができる。最初はお茶会をやっていましたが、そのうち、家の梅の木を梅を見ていたら「あの梅を採らせてほしい。」という人ができました。今の次期、梅がポロポロ落ちるので拾うのも大変だし、「それだったら家に来て拾ってくれていいよ。」と言う話になりました。拾ったら次は「梅酒を漬けたいけど、梅酒の作り方が分からない。」となり、私が梅酒の作り方を教えるワークショップを家でやることになりました。だから家の可能性って実はすごくあると思っています。それはやはり集会所とか公園とかにはない楽しさみたいなものがある。芦屋は特にそういうことに使える家がたくさんあると思います。そこに集まった人って、ものすごく絆ができるんですよ。だから私は係活動を作る時に、ここに集まっている人で係を作ったらいいなど、自分で実感しています。そのストーリーは割とショートカットでもいいのではと思っています。だから1から作るのではなく、SDGsではないですが、あるものを使っていくということを市がもう少しやりやすく、お金を出すとかではなくて、そう

いうことを推進すれば、それもひとつの大きな解決策になるのではという実感があります。

ということで、議題2に移ります。議題2は「次期市民参画協働・推進計画」についてです。事務局の方から説明をしていただけますでしょうか。

**(事務局：御宿)**

◆事務局より資料確認を行います。

◆事務局より、「第3次市民参画協働推進計画骨子(案)」に基づき、議題2について説明します。

市としてはこれからの社会を見据えたときに市民参画協働をこんな風に取り組みたいという内容のお話でしたが、このことに関して委員の皆さまからご意見をいただければと思います。

**(渡辺会長)**

ディテールから入ってしまいますが、ITについては私もちょっと気になっています。そのあたりは加藤さんがご専門で、前回も提案みたいなものをいただいて、その意見を取り入れて柱にしてきているので、加藤さんにその辺りアドバイスや、それ以降に考え付いたことがありましたらお願いします。

**(加藤委員)**

制約とか予算とかまったく度外視でという話にはなりますが、手段としてだけでやると、結局やらなきゃいけないとか、やらされている感になってしまう。参加型のシグナルというか、前向きな気持ちで参加したくなることとセットでITツールを使うやり方がいいと思います。ITは便利なものですが、それを使ってアンケートを取るだけだったら、紙がWEBになって便利になっただけで、気持ち的には変わらない。参加してメリットがある、楽しくなるという動機づけという心理面が重要で、結局ITというかWEBは、手段の1つでしかないと思っています。

全然違う話になりますが、例えば最近、健康促進みたいなもので商工会とか巻き込んで、歩いた距離をポイントにし、それを商工会で使えるポイントに変えて、お金を還元させるという話もあります。そういうポイントと商店街を連携させて参加することで、運動をして健康にもなる。ポイントを使って商店街で買い物をしたら地域活性にもつながる。そういうことに参加する人達は「運動しなさい。」と、言われてもたぶんしない人たちで、結局それをポイントに還元できてお金になるとか、お得感を感じられるから参加している人が多いのではないかと思います。例えばそのアンケートで意見を取る時も、このようなメリットがある仕組みがあるといいのかなと思います。

**(渡辺会長)**

ありがとうございます。平野先生はいかがでしょう。

**(平野副会長)**

最初と違う観点からですが、芦屋は学校給食の本がすごく有名ですよ。有名だという事は知

っていますが、あれはメニューが凄いのですか。

**(事務局：御宿)**

メニューもそうですが，作り方が栄養バランスも考慮されていますし，学校ごとにメニューが全部違うんです。それは栄養士さんや調理師さんがとても勉強されていて，基本的には手作りで冷凍食品は使わないし，実際に食べたらすごく美味しいです。小さい時から住んでいる芦屋市民の方は，当たり前だと思っているみたいですが。

**(平野副会長)**

どの町に住んでいるかというのも関係しているのですか。

**(事務局：御宿)**

栄養士さんも異動するので，栄養士さんが変われば学校の特色も変わります。

**(渡辺会長)**

それって芦屋全体のブランド化に役立っているのでは。

**(事務局：御宿)**

そうですね。やはり食育の観点から，芦屋の給食というのは栄養士さんがちゃんと考えた献立で，しかも1食あたり国からの補助との関係性で市から出せる金額が約250円です。予算的な制約もある中で，高いクオリティで作っている。「安いし美味しいし，どうなっているのかな。」というのが興味を引いたところだと思います。

**(平野副会長)**

市民協働の定義とは何かと言った時に，私も条例やいろいろな文献を読んでいて，操作的定義という，はっきりできて操作できるような定義の仕方があります。定義はレシピだと思う。つまり「カレーを定義して」と言った時，操作するという事はカレーを作るという事です。ここで学校給食の話とつながります。つまり，給食の本が売れるという事を想定しながら，市民参画協働の計画を作る時に，レシピ本のようなものがあると思うんですね。つまり「芦屋の第3期市民参画協働計画はこういうレシピでやります。」というもの，いろんなパターンを中に込めてレシピ集にする。こういうのは渡辺さんが得意だから。

**(渡辺会長)**

はい，がぜんイメージが湧いてきました！

**(平野副会長)**

なぜこんなことを言うのかと言うと，市民協働の計画ってインパクトがないとマンネリだと思います。

例えば、地域福祉と言うものに定義づけをすると、地域福祉を献立に何を入れて何をするのかと言うのは無限にあるわけです。無限には出来ないけど、何パターンが作れるのであれば素晴らしい本になると思うんですよ、レシピとして。ですから芦屋型でいいと思います。芦屋のブランドとか、大きい家があるとか、家の片隅をオープンにするとか。他市ではなかなか出来ないのかなと思いますので。そういう市民参画協働の戦略レシピ、献立みたいなものを、材料は何と何とか。ちょっとそういう計画が出来ると売れるかなと思います。なんとなくそういう計画を立てたのち、次に皆さんがやっている市民参画協働レシピを募集するとかね。「私は個人的にこういう事を行っていますよ。」とか、企業でもなんでもいいです。どんどんレシピ集を増やしていく。

**(渡辺会長)**

アップデートですね。

**(平野副会長)**

そうですね。どんどん新しいレシピを取り込めるようなものですね。色々なことをやるけど、やはり市民参画協働をもう一度芦屋らしく定義とするというか、説明しなおすという方がいいのかなと感じます。そういうものが似合う街です、実際に。

**(廣瀬委員)**

素晴らしいです。平野先生がおっしゃるとおりやった方がいいと思います。この会議を何回やっても、平野先生みたいな考えが出ないと同じようなものを作ってしまい、進展がないと思います。何回やっても同じです。去年とパーセンテージがちょっと変わったとかその程度で終わってしまう。平野先生がおっしゃっているような計画を作ると変わると思います。

**(加藤委員)**

先ほど書かれていた優れたデザインによるとかに関わる話ですが、僕が芦屋市民でありながら、芦屋以上に山崎亮さんが関わっていた島根の海士町の事の方が詳しくあったりする。計画とかではないですが、海士町が冊子を作っていて、すごく欲しいなと思って実際に旅行にも行き、その冊子も持っています。市の行政の話だけど、手に取り、欲しくなるようなものはなかなか無いです。市民だけの話ではなくなりますが、いろいろな人が欲しくなるような行政の刊行物ってなかなか無いです。あと企業の話になりますが、一時期流行った“きむ”という写真と詩を一緒にするという、写真家と言うかイラストレーターがいて、その方に新卒採用の会社説明会資料を作ってもらったところ、その“きむ”の作った冊子が欲しくてエントリーが殺到するということがありました。それもひとつの戦略です。優れたデザインと合わせて芦屋らしいデザインとか、どういうものかは分からないですが、読みたくなるというより手に取りたくなるというのは重要だと思います。

**(渡辺会長)**

加藤さんが言っているのは海士町総合振興計画の副読本なんですよ。海士町はちゃんとした計

画冊子も作っていて、プラスで副読本を作るというパターンです。その海士町の副読本の面白いところは、1人で出来る事、10人で出来る事、100人で出来る事、1000人で出来る事に分けてあります。1人でも出来る市民活動のアイデアを募集して、次に10人くらい集まったら「次はこういう事が出来ますよね。」と。そして、1人とか10人全員がしゃもじになっていて、それぞれのしゃもじには顔が全部に描いてあって、そのしゃもじの顔をよく見ると誰のことが分かるようになっていて。名前は出ていないけど、しゃもじの顔を見たら「この人は10人集まったらこんなことができるんだな。」っていうのが分かる副読本なんです。それが大人気になって、私も1冊しか持ってないですが。行政として、難しい報告書を作らなければいけないのは分かっているのだから、プラス副読本みたいなかたちで作るのはどうでしょう。多くの市民は難しい本編の計画は本箱に立てたままになっているけど、しゃもじの副読本は見ているという。そういうようなやり方も面白いかなと思います。

それは平野先生がおっしゃったレシピ集に極めて近いようなものです。私がさっき「イメージが湧きます。」と言ったのは、私はしゃもじの副読本には関わっていないのですが、広島とかいろいろなまちの総合計画やまちづくり計画の副読本を作ってきた経験があるので、平野先生が「レシピにしたらいじやない。」とおっしゃった時にすぐにイメージが湧きました。

実は、昨年、市からの依頼で、私がファシリテーターをつとめて、「まちデザインラボ」というワークショップを開いたんですよね。この時のまちラボの参加者の人たちが、すごく熱心で、ワークショップは机上のお勉強を会議室で集まってやっていたのですが、終わった時に「いやいや、このままでは市民活動ができない。」という話が参加者の間から出たんです。「机上のお勉強はしたけど、これだけで放り出されたら自分たちで実際に立ち上げることは難しい。それは残念なんです、何とかもう少し続けられませんか。」という人が何人もいました。そこで私が、その活動が実現するまでのアドバイザーをボランティアで引き受けることになりました。そして今、1個ずつ実現させている状況です。そのボランティアを私は楽しんでやっているわけですが、ひとつのモデルはここにあるのではと思います。「市民活動をやりましょう、市民活動のやり方を教えますよ。」とやってもそれを実現させるには「あなたがハードルと思っているところは、こういう風に取り除きましょう。」と、何かしらサポートしてあげないといけない。それはお金、技術、人の問題などさまざまですが、それを少し取り除く手伝いをしてあげて、現実に1回でもそういうイベントを実現させることによって、ものすごく自信になって、あとは自走し始めるんですね。私は市を批判するわけではないけど、市はいつも机上のお勉強の場は作ってくれるけど、そこから実際に立ち上げるまでがすごくハードルが高いです。そこを押し上げてあげるとか、ヒント与えたり、ノウハウを教えたり、人や場所を紹介したりする。現実化するためのアドバイザーがいるといい。だからそれを市民活動アドバイザーみたいなかたちで制度化して、それをちゃんと市が認めてくれるような役割が必要です。ただそこに市は関われないと思います。相談内容がものすごい細かいから。「スコープどこで買った方がいいですか。」とかそういう話が多い。だけどそういうことを解決してあげないと、やはり現実のものにならないのは確かなんです。ただそういうところは公務員さんが関わることではないから、それができるアドバイザー、サポーターという言い方がいいかもしれない。そういうものを制度化してもらえると、この柱となる考え方がもっと具体的になってくるし、実現性も高いのかなと思います。

もうひとつはメディアに対する発信が、皆さんプロではないので、うまくできていない。でもそれは仕方ないので、メディアを作れるし、アイデアがある人が市民にいて、さっき言ったことと同じですが、形にした時に、いかに芦屋でスマートな発信で、楽しくできるかという事に対する、支援の仕方もあるか考えてみたらいかがかなと思います。それをすごく熱心にやっているのが神戸市です。神戸市は市民がいろいろなところで活動していて、自分たちでフリーペーパーを作りたい時に、それに対して助成金が出ます。自分たちで編集作業位はするけども、それをちゃんとしたデザイナーに頼んで、みんなに見てもらえるようなデザインにするためのお金が市から出たりします。そうしたことにそれなりのお金が出ることによって、自分たちのアイデアやシードが、ちゃんと見て素敵だなと思う状態で世の中に出ることが現実化していくわけです。行政の中だけでやると、ここが面白いよねというアイデアも通り一辺になる。デザインとしての見せ方も「まあまあ、こんなものだろう」というものになるから、行政デザインみたいな同じようなものはいくつもできるだけ。その辺が面白くない。せっかく芦屋はお洒落なまちだと思われているのに、じゃあお洒落なメディアがあるかということ、全然ない。まちのメディアの発信力の肝は、さっき加藤さんが言っていたように、旅行に行った時にそのまちの情報誌を記念にもらってきて、友達に「ここすごく良かったよ」とロコミして、今度は一緒に再訪してもらおうという行動を引き出せるかどうかですね。それはWEBでもいいのですが、そういうチカラをもつ媒体を、市の援助も受けて実現させられたら、「市民参画していたら楽しいな、しかも市も助けてくれて自分が思っていたような素敵なものができるなんて、この市の住民でいるのは、なかなかいいんじゃない？」と実感できますよね。そういうことが大事だと思います。

#### (加藤委員)

先ほどおっしゃられたレシピの話、すごくいいなと思っていて、連想してしまったのがクックパッドです。例えばカレーでも人や家庭によってレシピが違ふ。いろいろな人が自分のレシピを上げているわけです。先ほどの海士町の発行物のような、WEBじゃない媒体も重要ですが、WEBのメリットって更新だったりとか拡散だったりします。そのレシピを市民がどんどん投稿していけるような、例えば、あしや市民活動センターの使い方という項目があるとして、「私はこう使いました。」などいろいろな投稿されていて、検索した時に「こういう使い方ができるんだ。」というのが知れるとか。例えばクックパッドでも、“つくれぽ”というのがあります。自分が上げたレシピを参考にしてくれた人から「美味しくできました。」という書き込みがあったら、それにつながりができる。それってレシピに対してコメントを貰える嬉しさもあるし、それを参考にした人も、そのレシピが知れて良かったと思う。どんどんそのつながりが広がっていく。

#### (渡辺会長)

アドバイスとかもありますよね。「この作り方をもとに私はこうアレンジしたらより簡単にできました。」とか、そういうコミュニケーションがどんどん入ってくるから、さらに楽しくなっています。

#### (加藤委員)

それを含めてコンセプトとしてレシピってすごくいいと思う。芦屋版クックパッドじゃないけど、何かの使い方とか、何かのやり方とか、それこそアイデアの発掘とか、事業の起こし方とか。いろいろな項目があって、市の方で枠組みは用意するけど、市民がそこに投稿して交流していく。そうなるってすごくいいなと思います。その有名な給食になぞらえて、レシピで。先ほどおっしゃってた海士町のしゃもじって、祭りで使うのですか。

**(渡辺会長)**

そうです。しゃもじを持って踊る、海士町の名物の祭りから取りました。“キンニャモニャ”というお祭りです。そこから町民の顔をしゃもじにあてはめました。

**(加藤委員)**

芦屋の象徴が給食と言っているのかはわかりませんが、そこを切り口としてコンセプトにするのはすごく面白いと思います。興奮してきました。

**(渡辺会長)**

私も興奮してきました。

**(事務局：御宿)**

今いただいた意見は行政にとって、頭を打つような話だと思っています。実はこの計画を作る時に担当としてすごく悩んでいたのが、どのような計画体系にするかということです。行政の計画のうち、理念型の、考え方や方針だけを示すような、いわゆるマスタープランと、実施計画と言って事細かに取組を記載しているの也有ります。後者の場合、施策ごとに全ての取組を紐づけていきます。そうなった時に、今示されたレシピのやり方は、その中間的なやり方で。例えばそれがカレーを作るというやり方。一定のレシピを示すものに対しての、そこから先はおっしゃっていただいたような広がりですよね、それぞれの人、それぞれのアイデアの幅がある、ある意味でのこの計画そのものが、ちょっとした余白があるような感じで参加出来るという。具体的にこういうものだよという例示を示しつつ、一方でそれにとどまらないような示し方なのかなと思っています。あまり今までに無いような計画の策定のスタイルで、次の計画策定の参考になるいい意見をいただけたなと思い、感謝しております。取入れていきたいなと思います。

**(渡辺会長)**

そういうことで、他にご発言されたい方いますか。時間的にあとお一人くらい。山岸さんいかがですか。

**(山岸委員)**

私もいろいろと勉強になりました。

**(平野副会長)**

一点だけ補足ですが、先ほどラボの話や社会実験があって、実験段階のレシピもあるわけですよ。ですからそのレシピに従えと言うわけでは決してないところがポイントです。「市民協働は計画的に進められるのか？」という逆説的な問いかけなんです。そのレシピにいたるプロセスをはっきりしておかないと間違ってしまう。つまりいくつかの実験的な段階を、行政はそれを認めたいとなると、それは非常に難しい。レシピを現実化するために、あえて言っているだけで。やはりどこかで、「協働を計画的に推進できるわけではないのでは。」という前提の問いかけをしてもらった方がいいかなと思いました。そういう意味では「このレシピ集もひとつの市民協働に向けての実験だよ」と、緩やかに受け止めてもらわないといけないです。

**(渡辺会長)**

お楽しみというかたちでね。お楽しみでやらないと、これが「天下の印籠」になってしまうと、ものすごく危険だし、みんなから意見を募集すると募集するだけ危険なことがあるので。

**(平野副会長)**

計画としてのレシピではないというニュアンスで、うまく作ってもらいたいという意見、留意点です。

もうひとつ。やはり行政なので、実験結果から一定の法則性を導くことは重要だと思います。そこから価値のある物は何かしらの助成をしていく。ただ、先に助成があると厄介だと思います。だから実験結果を踏まえての助成ということを考えていく。結局レシピをどのように構成するかが一番のポイントで、その点では「市民活動センターの使い方」というのはとてもいいレシピの1つだと思いますが、いろいろな事を考えないといけないので、先は遠いとは思いますが、丁寧に温めないといけない。

**(渡辺会長)**

はい、「市民活動センターの使い方」については、市民ワークショップから芽生えた、美味しくなる可能性がたっぷりの貴重なレシピですから、急かないで、みんなの感情や感覚を大事にしながら、見えては行き止まり、見えては行き止まりしながら進めたいと思っています。ということで、よろしいでしょうか。では、皆さん今日は貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。